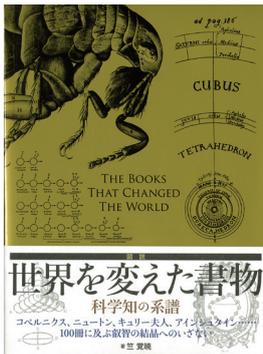


書評・紹介

竺 覚暁 著

『図説 世界を変えた書物 ：科学知の系譜』



本書は、科学技術の古典の書誌図版であるとともに、書物を主役に自然科学の発展の歴史を論ずる科学史概説でもある。

筆者には科学史の観点から本書を論評する力はないので、歴史研究の立場から古典籍の書誌図版としての本書の意義を

中心に論じ、評者としての責を果たしたい。

著者の竺覚暁氏は、金沢工業大学ライブラリーセンター館長(図書館長)を務められた方で、専門は建築論や建築史であるという。金沢工業大学ライブラリーには「工学の曙文庫」という稀観書コレクションがあり、竺氏はこのコレクションの収集・保存に尽力された方である。このため、本書掲載の図版は全てこの「工学の曙文庫」所収の稀観書に基づいたものとなっている。つまり本書は、コレクションの伝来・経緯を収書者自身が記録した、「工学の曙文庫」にとっての記録史料とも言える。金を基調としたブックカバーは、曙光つまり太陽の光とともに、金沢伝統の金箔をイメージしているのであろうか。

さて、本書の構成について、目次から Chapter レベルの見出しを抜き出すと次のようになる。なお、目次に Chapter 番号は振られていないので、各 Chapter の扉から補った。また、Chapter 8 のタイトルは本文中では「無線通信・電話・電磁場」(傍点筆者)となっており、目次が誤りかと思われるが、ひとまずそのままに掲げておく。

はじめに

1. 古代の知の伝承
2. コペルニクス地動説宇宙
3. ニュートン力学的宇宙
4. 方程式・対数・微積分・解析幾何
5. 光
6. 物質・元素
7. 電気・磁気
8. 無線・電話・電磁場
9. 原子・核
10. 非ユークリッド幾何学
11. アインシュタイン相対論宇宙
12. 量子論

科学知展開の系譜

索引

目次を一瞥すれば明らかなように、本書の対象とする学術の範囲は自然科学全般に及んでいる。狭義の工学にとどまらず、関係する諸学を網羅しており、これだけでも、収書者としての著者の高い見識が垣間見られる。収書に際して著者は、「科学技術の発展が系統的、体系的に辿れるコレクション」(4頁、以下、引用は同じ)の形成をめざしたという。

およそ科学としての学問であるならば、その学問の発展を史的観点から研究する分野がある。これらは一般に「学史」や「科学史」と呼ばれ、理系文系を問わず、各学問分野における基礎研究の一翼を担っている。

著者は、工業大学の図書館における価値ある書物を「科学技術の発明、発見が記された科学技術稀観書であると考え」た。また、工業大学における技術者養成では、技術の失敗や、技術の間違った用い方を、学生たちに歴史から学ばせる必要があると説く。おそらく著者は工学における学史研究の意義と、学史に基づく教育の意味を古典籍に見出したのではないか。

そもそも、全ての事物はあらゆる過去の事象の積み重ねの上に成り立っている。ニュートンも用いた「巨人の肩の上」という有名な言葉は、このことへの暗喩である。研究の世界を例にみると、研究者はともすれば、最新の研究成果だけに価値を見出しがちである。しかし、最新の研究成果は、数多くの過去の研究成果を土台として成り立っている。研究者にとって過去の研究は、自分の研究の正統性を証明するために必要不可欠なものであり、過去を知ることは自身にとってのリスクマネジメントに等しいと考えるべきなのである。もちろん著者が指摘するように、過去の成果には失敗や誤りなどマイナスの成果もあり得る。同じ轍を踏まないようにするにも、過去を理解することが重要となる。

このように考えると、本書は工学を基礎とした自然科学全般を切り口として、人類が過去を正しく理解する意味を問うた書物だと評することもできよう。

本書は、1冊の書籍を見開き2頁で説明するのが原則とする。左頁に、内容的に重要な部分の見開き写真と背表紙の写真を載せ、解説が記される。右頁は、表紙、裏表紙、天、前小口、その他主要部分の写真を載せ、学史上の位置づけを系統図で示す。頁の下部には時間軸を描き当該書籍の年代が一目でわかるよう工夫されている。

一般に古典籍の図録の写真では、トリミングによって直接に必要な部分以外がカットされていることが多いが、それを一切せず、書籍の実際の姿をそのまま画像として掲載している点は、本書の大きな特徴である。

加えて、背表紙、表紙、裏表紙、天、前小口といった部分の写真に紙幅を割き、掲載書籍全点について縦、横、幅の大きさの数値を明示している点も他にはない特徴である。

私たちは平素から、古典を複製した図録や図

書館のデジタルアーカイブに多くの恩恵を受けてきた。しかし、敢えていえばこれまでのものは、内容情報の判読という点に焦点があてられ、モノとして書籍を表現するという点では、決して十分とは言えない。また一般的な図書館目録において、書誌情報の形態欄に記される大きさは、縦方向の大きさが、ミリ単位切り上げで記されたものである。これは、縦方向の最大値を記すことで、入れるべき書架の高さを把握したいという管理上の目的からの数値であって、書誌学・古文書学的にはあまり意味をなしていない。

書籍の装幀や大きさは時代や地域、社会、さらには著者・発行者・所蔵者といった、その本に関わる人々の思想・心情を表わすことすらある。内容研究だけでは把握できない部分や、内容研究を強固に裏付ける重要な鍵が、本のモノとしての側面に潜んでいるのである。しかし、上述のように、一般的な図録類や図書館が提供する書誌情報やデジタル画像にはこういった面への配慮がほぼなされていない。筆者は一つの解決策として、デジタルアーカイブにおいて、表紙・背表紙・裏表紙・天・地・小口も全て撮影して提供することを試みてきた。そのような折に本書を目にし、思わず我が意を得たりと叫びたくなった。

以上、本書の特徴を改めてまとめると、内容情報から自然科学の古典の学史的な位置づけを行なうと同時に、モノとしての書籍を写真と数値で表現し、二次元の平面の中で両者を融合するという極めて斬新な書籍であるといえよう。本書の刊行は、今後の図録類やデジタルアーカイブの表現方法に一石を投ずることとなるだろう。

グラフィック社、2017年刊、25.8×19.4cm、191頁

【附記】本稿はJSPS科研費16K12543および15H02786による知見に基づいている。

(小島浩之)